

いろいろな講座も始めています

障害のある子どもたちの親子陶芸教室

Interview

障害のある人の教室だったので参加しました。初めての部屋だったので、最初は入れずに口ビビりにいたのですが、大津支援学校の先生も支援してくれたので入れるようになりました。参加した人みんなが障害のことを受け入れてくれると安心感があったので良かったです。またこういう講座を開催してほしいですね。



いわなが みき 岩永 美枝さん
いっ き 一希くん

今年夏の休みに「障害のある子どもたちの親子陶芸教室」を開催しました。おおづ図書館で行われたこの教室では、障害のある子どもたちと親と一緒に皿や器などを作りました。また大津支援学校の先生もサポートを行い、子どもや親が安心して参加できる教室となりました。

町はこれからも障害のある人の社会参加に向けた活動を進めていきます。



陣内食堂の思い出



1. 多くの人家族連れで参加しました。ピザに流しそうめん、かき氷。楽しみがいっぱいでした。2. 好きな具材を載せる自分だけのピザ作り。おいしくできかな。3. 竹を切った流しそうめん。4. ゆっくりとした時間が流れ心が安らぎます。5. 自分で作ったピザにかぶりつきです。おいしい？

やさしさの連鎖が共生に
害のことを、知ってもらえないのは怖いけど、知ってもらえないのは悲しい。障害のある子どものお母さんが話した一言です。

障害のある子どもがいる。障害のある人のことを分かってほしい。でも、押し付けていると思われたくないから、伝えるのが怖い。

ただ、自分の子どもについて、みんなに知ってもらえないのも悲しい。

そんな思いをお母さんから感じました。いろんな人が、それぞれの人生で、一生懸命生きていくことの中では、お互いに共感できることは少ないことなのでしょう。

陣内食堂での子どもたちの笑顔、お父さんお母さんのほほ笑み、おじいちゃんおばあちゃんが目を細めるのを見てみると、これが共感による共生なのだと感じます。

子どもたちの参加者は、陣内食堂が障害者の支援施設で行われていることを知らないかもしれない。地域で大人になっていくうちに、そこが障害のある人の施設であるこ

ペアレント・プログラムとは？

ペアレント・プログラムは、子育てのプログラム。子育てに難しさを感じる保護者など、子どもに関わる全ての人に有効なものです。楽しく子育てをする自信をつけて、子育ての仲間を見つける機会をつくることを目的とした全6回のプログラムです。参加した人は「子どもを褒めることが上手になった」「もっと早く受けたかった」「気持ちが楽になった」など効果が表れています。参加を希望する人は、まずお問い合わせください。



問い合わせ
役場福祉課
☎096(293)3510

熊本地震がきっかけに

ペアレント・プログラム（ペアプロ）は、中京大学の教授である辻正次先生を中心とした「NPO法人アスペ・エルの会」が作られたものです。平成28年に熊本地震が発生しましたが、その翌月に辻井先生と弘前大学の中村和彦先生を中心に被災状況を確認しました。東日本大震災では自閉症の人たちの過敏性が高まっていて、いろんなことが心配されていたので、6月にもう一度、辻井先生が来熊したのですが、まだまだ地震から落ち着いた様子がないことが分かりました。

それから、子どもたちのために「遊ぶ会」を開催し、半年の間、移動水族館を呼んだり、牧

ペアプロは行動で見る

ペアプロは行動で考える、行動で見ることに特化しています。参加者には身近な人を褒めようという宿題を出すのですが、2〜3回と褒めていくうちに、子どもを褒めて伸ばす効果を実感してくれます。また参加者同士で話をする中でいるんな人と交流が生まれます。

場に行ったり、多くの催しを行いました。

その後、地震の支援としてペアプロを一緒に行っていた社会福祉法人白川園 相談支援センターいちばん星の伊豆野良栄セクター長から、「ペアプロを大津町の子どものために行っていきたい」と言われ、一緒に取り組みました。



参加者同士で話すことも多いプログラムです

全6回のプログラムですが、子どもの保護者だけが対象ではなく、子どもに関わる人全員が対象です。

プログラムの中で出てくる言葉に「ギリギリサーフ」というものがあります。例えば「おやつを食べすぎる」という困ったことがあっても、食べすぎて部屋から出られない

九州看護福祉大学
専任講師 水間 宗幸 さん

くらいに大きくなることはないですよ。食べすぎるけど「量を控える」「カロリーが低いおやつを選んでみる」などを心がけているはず。これが「ギリギリサーフ行動」です。「困っている」ことから「努力しているところ」や「その人のいいところ」に行動が移っていきます。

こういった行動で見ることで、自分や子どもが頑張っていることが見えてきます。行動のコツが分かれば、子育ては楽しくなってきます。

このプログラムは支援者としての参加も可能です。支援者は、学んだことを幼稚園や保育園、学校や家庭などで生かすことができます。大津町で参加してくれた約30人の支援者の人たちも熱心にプログラムを受けてくれました。

支援者を含め、子どもの幼少期からきちんとサポートしていくことで、未来への先行投資につながります。

今後、大津町の保育園や幼稚園など、いろんなところで支援が広がり、子育てがより楽しくなる町になっていくことを期待しています。

とを知るのでしよう。知識とは、押し付けられて得るよりも、自然と納得して得る方が、自分のものになるのかもしれない。だから「伝える」ではなく「伝える」ことが大事なのでしょう。

障害のある人についての理解が自然と深まっていくように、大津町は障害福祉を推進していきます。それが「夢と希望がかなう町」の実現につながるのと信じて。

自分のことのように。共感はやさしさを生みます。互いのことを思いやるやさしさの連鎖が、共生に一番必要なものではないでしょうか。共感があふれる町は、誰もが住みたくなる町になります。

私たちが、大津町に福祉の花を咲かせ続けましょう。

シリーズ 障害福祉
共感を 共生に 終